

小京都のそうせい簇生

武庫川女子大学教授 森谷 尅久

今から約二十年前のことになるろうか、「全国京都会議」が京都で開催された。参加した市町は全部で五十二に達している。北は東北の弘前から、南は九州の知覧にまで及んでいたという。いずれも「小京都」と自称する、京のみやこ文化を受け継いだところが集合した会議だった。

この「みやこ」の文化をきずなとして、観光文化を盛りあげようという意図があったことはいうまでもない。会議は大変盛況だったという。

ところで、この「小京都」という言葉が使われたしたのは、その会議の約二十年前、昭和四十年代のことだった。戦国時代の研究が進むなかで、京文化の拡散がみられ、日本列島の北から南、東から西に、「小京都」が簇生した事実が浮かびあがってきたからである。戦国時代の約百年、京都は、激しい戦火にさらされ、まさしく灰燼に帰した。かつて誇った荘麗な都のかたちは、完全に失われてしまっていた。ある文人は、都は一面麦畑におおわれ、ひばりが舞いあがっていたと伝えている。

むろん、多くの都人たちは、姿を消していた。かなり早くから、近郊あるいは近国に疎開している。近いところでは、近江、大和、摂津、和泉へと逃れている。たとえば、京の織物業者の集団は、堺に避難しているが、それがまた織物の新技術を吸収することにもなっていた。のち、西陣に居住することになる織物業者の一団である。

都人の上層階級である公家衆の疎開は、さらに遠国に向っている。一条家は、大和にも一時避難しているが、さらに遠く土佐にまで逃れて足をのぼしていた。のち一条家は、このまま土佐中村に落ち着き、ついには戦国大名の一人として名を成した者まで出現している。

戦争というものは、まことに過酷であるが、見方を変えれば、非常にドラマチックな文化交流が行われたともいえる。戦国期に京都に入って活躍した諸大名、たとえば周防山口の大内氏は、積極的に京文化を導入したことで知られる。その大内氏は、さらに自国の周辺に京文化を扶植している。事実、都の公家、学者、僧侶たちが、山口周辺に多数下向して、交流していた。この文化的記憶が「小京都」を自称させることになった。実際、この時期、多くの小都市で「小京都」が簇生することになった。

西川と近き川 —源氏物語における桂川と加茂川—

相馬 大 (詩人)

むかしは、京の^{みやこの}ひとびとの、心のなかを、京の川は流れていた。そのころは、桂川と言うよりも、「西川」と呼び、加茂川と言うよりも、「東川」と呼ぶことが、一般的であったらしい。ときには、東川を、「近き川」と言っていたようである。

それは、王朝時代、左右両京の右京がさびれ、左京に、貴族をはじめとして住んでいたから、加茂川を「近き川」と呼んだかと思われる。この二つの川は、重要な生活の川でもあった。交通に、漁業に、産業など、多くのことで、王朝びとを、ささえてきた命の川でもあった。あらたまったとき、「桂川」「加茂川」と言い、また親しみをこめて「西川」「東川」(近き川)などと呼んできた。

いと、あつき日、
東の釣殿に出でたまひて、
涼みたまふ一。
西川より奉れる鮎、
近き川の石伏やうのもの
お前にて、
調じてまゐらす一。

<常夏巻・源氏物語>

光源氏の造営した六条院の夏の御殿。そこには、花散里・夕霧・玉蔓が住んでいる。夕霧など、若いひとびとに、光源氏が、もてなしをしている。池に、少し、かかる釣殿は涼しい風のふく御殿である。夏には、皇室へ、桂川の鮎が届く。そのついでに、光源氏の六条院にも届く。冷泉天皇の、はからいによる鮎らしい。冷泉天皇は、藤壺宮と光源氏とのあいだに生誕された不義の運命をもち、光源氏を、ひそかに父として、したっているからのようである。光源氏三十六歳、冷泉天皇十八歳、夕霧十五歳の夏のことである。

また、加茂川を、高野川との合流地点からの流れを、鴨川とも書きわけけることもあるけれども、『源氏物語』では、「加茂川」という表記で統一されている。その川の魚である「石伏」は、「鮎」のことである。鮎は、水のなかの石にのって休み、石のかげにかくれたりするので、「石伏」と呼ぶ。鮎をとるとき、蓆を二枚つなぎ、その上に石をのせ、水に沈める。上流の二人が、蓆のはしをもっている。川下から、T字形の棒で突いて、蓆に、鮎を追いこむ。鮎は、蓆の上の石の下や間に逃げこむ。すると、T字形の棒を、岸に投げ、川下側の蓆の端をつかみ、四人で持ちあげ、岸へと運ぶ。この漁法を、「鮎押し」という。いまも、京ことばとして、「ごりおし」が残っている。

この加茂川と桂川は、下鳥羽で、合流して加茂川の名が消え、桂川となる。みやこの羅生門の前から、鳥羽の作り道が、南にのびてきて、「鳥羽の草津」の湊に至る。

あの菅原道真も、この湊で川船に乗り、くだっていき、浪速の神埼で、海船に乗りかえて、大宰府へと流されていった。光源氏も、須磨へ流れていくとき、同じコースをたどって流れていく。が、菅原道真の話が、あまりにも有名なので、ほとんどが、省略されている。気づかないひとにと、

駅の長に

句詩とらす人も一。

<須磨巻・源氏物語>

と、作者は書く。明石の駅長が、菅原道真の運命をかなしむのに、道真が一篇の詩を与えたことを示し、無実の罪の道真と光源氏を重ねることにより、ふたりの運命を、読者に知らせようとしている。いまも、その場所の休天神社には、菅公腰掛石がある。

ゆく川の流れ、それが、西川・東川(近き川)であり、『源氏物語』の登場人物の心のなかを、流れていた川である。

「様ざまな月」

朧谷 寿 (同志社女子大教授)

暑い夏が遠のき心地よい風が頬をなでる頃になると、なぜか夜空に照る月をじっと見つめたいくなる。冷泉家の遠祖の歌聖、藤原定家は19歳のときの『明月記』九月条に「夜に入り、明月蒼然たり、故郷(平安京を指す)寂として車馬の声を聞かず、歩み縦容にして六条院に遊ぶ」と記す。また彼の撰になる小倉百人一首には月を詠んだ歌が十首ほどあり、そのなかで恋に掛けずに純粹に自然を詠った夏の歌は、

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを 雲のいづこに月やどるらむ

である。藤原深養父(9世紀の歌人、清少納言の曾祖父)の作で、早くに明ける夏の夜の短さと空に残る月の行方を慮った一首である。また秋の歌は次の一首がある。

秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけさ

作者は12世紀前半の歌壇を牽引した傑出の歌人の藤原顕輔で、秋風に吹き切られた雲間から臨まれる澄み切った月を詠んだものである。

同じく百人一首に採られている三条天皇(976～1017)の歌は苦悩に満ちた一首である。

心にもあらでうき世にながらへば 恋しかるべき夜半の月かな

眼疾による視力の低下に加えて叔父、藤原道長(966～1027)の圧迫に抗しきれずに譲位を覚悟した天皇が、師走の夜更けの月を眺めながら詠んだものである。年あらたまって帝位に就いたのが道長の孫の後一条天皇(9歳)である。この天皇は、中宮彰子を母として誕生した一条天皇の第二皇子である。因みに第一皇子は中宮定子所生の敦康親王であったが、すでに後見人を失っており、帝位の希望は絶たれていた。

道長は、後一条天皇が11歳になった寛仁二年(1018)の春に彰子の妹の威子(20歳)を入内させ、十月には中宮(皇后)とした。当時といえども異常といえる叔母と甥の結婚である。その日の立後の儀が宮中で厳粛のうちに挙行され、夕刻から場所を道長の土御門第に移して盛大な宴会が行われた。その様子は道長の『御堂関白記』からも知られるが、同僚の藤原実資の『小右記』の方が詳しい。そこに「一家に三后を立つること未だ曾てあらず」と記すが、三后とは太皇太后(彰子)・皇太后(妍子)・皇后(威子)を云い、道長は自分の娘で独占したのである。その後も例はない。酔いに任せて道長が、「誇った歌だが」と前置きして即興で詠んだのが有名な次の一首である。

この世をば我が世とぞ思ふ望月の 欠けたることもなしと思へば

同じ月を見ながら三条天皇の歌との大きな差異を感じる。道長から一首を所望された実資は固辞し、代わりに居あわせた公卿たちで道長の歌を唱和し、実資も数度吟詠したという。実資が固辞した真意は、歌の道ではるかに勝っている自分が下手な道長に付き合えきれない、といったところであろう。土御門第跡は今日の京都御所(禁裏)の東辺に求められるが、その夜は、しじまを破って寝静まった高級住宅域のなかに「この世をば」が響きわたったことであろう。宴も果て「夜深く月明にし、酔いを扶けて各々退出す」とある。

この夏の終わりに訪ねたアフリカのボツワナのロッジで仰ぎ見た月は大きく、南十字星や天の川をはじめ星座ともども澄みわたって、吸い込まれそうになった。

忘れたことば「細長う」

山下要三（山下織物・会長）

京の町家は細長く鰻の寝床のようだと言われるが、それとは関係ないか。

「細長うよろしくお頼み申します」と挨拶するのは、お茶屋の女将さんの常に出てくる言葉であり、とにかくこの街では細長く続くという事が良い事らしい。

室町や西陣で男が二十歳そこそこになると、親の名代でお得意先や学区の会合に出る機会が多くなる。会合の後の宴席には、きまって上七軒や祇園の芸者衆のお出ました。

宴会がお開きになると、先輩達は早々に「遊びも仕事の内や、そやなかつたらええ物作りへん」と二次会に繰り出す。確かに彼女達の着けている衣裳は素晴らしく、参考にもなるが、この様に先輩に連れられお茶屋に出入りするうち、仕事が先か遊びが先か、本末転倒し、だんだんと遊びに熱が入ってくる。

私達の年代は、子沢山で、したがって叔父や叔母の数も多く、なかでも歳のあまり違わない、それも少々道を外した叔父がいて、遊びのお手本を示してくれる。これらの叔父達は、少々度を越した私達に、その時分には少々お冠になっている父との間を上手に取り持ってくれたりもした。

戦前、西陣のそこそこの機屋では、息子に高等教育をつけねばと第一工業学校（現在の洛陽高校）や、松ヶ崎の高等織維学校へ上がらせ、技術を身に付けたものだが、高織などでは、ちょうど年齢も遊びたい頃、教師がそれを知ってお茶屋へ連れて行ったということを知った。

お茶屋遊びが昂じてくると、男なら太く短く面白く過ごすのが人生だと言い、益々派手になって来ると女将が「ねえボンさん細長ういきまひよな」とやんわりと自省を促す。

お茶屋の習わしとして、世帯を持つまではボンさん、結婚すると若旦那、子供が生まれてやっとなんと言ふ。ボンさんと言われる間はまだまだ監督の必要な青二才ということか。

京都のお茶屋では、常連の客に身分不相応な遊びはさせないし、また、あそこのお茶屋ではあの息子さんにひどい使い込みをさせた、などという悪評をたてさせない。花代の回収に心配は不要である。これも京商いのひとつかもしれない。

それでもなお派手な遊びをする者は、大他所者か戒金で、昔平清盛が「平の瓶子（へいじ）は素甕（すがめ）にて」と歌われ、揶揄したことも伺える。

細長く続けることは、お茶、お花、能などにとって欠かせない重要なことである。その気風が花街の女将さんに伝わっているのかも知れない。

しかし、近頃では、花街の芸妓の募集もインターネットを利用し、行儀やお稽古事も先輩のお姉さん方の直伝ではなく、マニュアル通り、その内芸妓組合の認定試験を受けさせ彼女達自身がホームページを開いて、お客さんと直接取り引きする時代が来るかも知れない。その時になれば、誰が遊び過ぎの若い人達に忠告を与えてくれるのであろうか。

京都の暮らし

西陣くらしの美術館 冨田屋

田中峰子

京の町は不思議な町。平安京が出来て以来、神さんとともに暮らしているのです。京都人の暮らしは日本の心です。町にはお地蔵さんがそのまま町内のお守りとなり、氏神さんは地域の心の支えでしょう。子供が生まれたら、氏神さんに「こんな子が生まれました。守ってくださいね」。七五三では「こんなに大きくなりました」という報告をし、20歳まで守られます。京都の行事には、みんな神さんとの触れ合いがあります。小さいころより、「罰あたりまっせ」といわれたころのことが思い出される町です。

季節ごとの家の中のしきたりには、みんな意味があります。お正月には、歳徳さんをお迎えする飾りや行事があります。七草粥や小豆粥をたべる意味もあります。2月は福は内を、3月は代々のお雛様がいっぱい、4月は花見、5月は家に生まれた男の子の大将さんを飾り、6月は夏のしつらえにかえて涼しさを、7月は七夕の節句、8月は孟蘭盆会で先祖の供養、9月は重陽の節句で菊を飾り、10月は観月、11月は新嘗祭で豊作を感謝、12月は師走。町家の1年は忙しい。そのたびに、家内安全、無病息災を祈っての家族が集まっているのです。

日本人は面白い。すべてに意味をつけては行事をつくる天才です。人は長生きをすることにも感謝します。還暦、古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿、白寿と言葉遊びでお祝いをしています。楽しい先人の知恵もたくさんあります。古き日本の暖かい心を思い出して下さるような雰囲気、家から出る“気”みたいなものを皆さん感じて暮らせるなんて、日本に生まれてよかったですね。母の残してくれたしきたりは、今はもはや消えようとしています。そんな心を後世に受け継いでいけるよう祈ってやみません。